

SHOW HEY シネマルーム

マイレージ、マイライフ

2009年・アメリカ映画
配給/パラマウント ピクチャーズ ジャパン
109分

2010(平成22)年2月9日鑑賞 東宝試写室

Data

監督・脚本・製作：ジェイソン・ラ
イトマン
原作：ウォルター・カーン『マイレ
ージ、マイライフ』(小学館
刊)
出演：ジョージ・クルーニー/ヴェ
ラ・ファーミガ/アナ・ケ
ンドリック/ジェイソン・ペ
イ
トマン/ダニー・マクブライ
ド/メラニー・リンスキー/
エイミー・モートン/サム・
エリオット

👁️👁️ みどころ

日本航空が破綻した今、マイレージが保護されたのは朗報だが、1000万マイルという途方もない数字の達成者は何人？タイトルはラブコメ風だが、リストラ宣告人という主人公の職業が異色なら、ネットで解雇通告というアイデアを出した新入社員も異色。さらに女だてらに「お気楽な大人の関係」を売りにする美女まで登場！

アカデミー賞は『アバター』(09年)で決まり！本作を観れば、そんな思い込みがナンセンスなことがよくわかる。ちなみに私の見どころは、西川美和監督の『ゆるる』(06年)並みの主人公の気持の「揺れ」だが、さてその帰結は？

.....

こりゃすごい！作品、監督の他、主演男優賞にも！

第82回アカデミー賞は、作品賞のノミネートが10作品になったのが大きな特徴。そして、さる2月2日に発表された候補作では、作品賞、監督賞含む「3強」が、ジェームズ・キャメロン監督の『アバター』、ジェームズ・キャメロン監督の元妻であるキャスリン・ピグロウ監督の『ハート・ロッカー』、そしてクエンティン・タランティーノ監督の『イングロリアス・バスターズ』で、それぞれ9部門、9部門、8部門にノミネートされている。

そんな中で大健闘しているのが、本作。本作は作品賞、監督賞の他、年間322日間も出張し、マイレージで1000万マイルを達成することを人生の目標としているリストラ宣告人ライアン・ピンガム役のジョージ・クルーニーが主演男優賞にノミネートされた。

さらに2人が助演女優賞にノミネート！

さらにびっくりするのは、ジョージ・クルーニーと共演した2人の女優が2人も助演女優賞にノミネートされたこと。その1人はライアンと同じように全国を飛び回り、ライアンと同じような価値観を持つ魅力的な34歳の女性アレックス・ゴラン役のヴェラ・ファームガ。もう1人は『トワイライト』シリーズで大フィーバーした若手女優のアナ・ケンドリック。アナ・ケンドリックが演じるのは、何とネットによって解雇通告を行うという新方式を考え出した現代っ子のナタリー・キーナー。ナタリーはベテランのリストラ宣告人として人情を重視するライアン・ピンガムと何かと対立することになる。

共演女優が2人もアカデミー賞助演女優賞にノミネートされたのは、第81回アカデミー賞における『ダウト - あるカトリック学校で - 』（08年）のエイミー・アダムスとヴィオラ・デイヴィスの例があるが、極めて異例。まさにジョージ・クルーニーは「両手に花」状態でアカデミー賞授賞式のレッドカーペットを踏むことになるが、その時はさぞかし鼻の下を長くさせていることだろう。

さらに本作は脚本脚色賞にもノミネートされているうえ、ゴールデングローブ賞ですでに最優秀脚本賞を受賞しているから、アカデミー賞レースの行方が楽しみだ。

ジェイソン・ライトマン監督の前2作は？

私はかなり以前から「たばこ一箱千円法」案を提案してきた（『シネマルーム12』377頁「コラム」参照）が、政権交代した民国社政権でやっと実現できそうなのは、1本5円、1箱で100円の値上げだけという体たらく。私がそんなコラムを書いたのは、ジェイソン・ライトマン監督の『サンキュー・スモーキング』（06年）を観た時だが、ジェイソン・ライトマン監督の長編デビュー作となったこの映画の問題提起の面白さと鋭さを感じたものだ（『シネマルーム12』373頁参照）。

ジェイソン・ライトマン監督の才能が広く世間に認められたのは、彼の長編第2作『JUNO/ジュノ』（07年）、16歳の初エッチで即妊娠というふしだらなテーマ（？）を面白く問題提起した才能はすばらしいものだった（『シネマルーム19』294頁参照）。

現代的センスが際立つ、ライトマン監督に注目！

マイケル・ムーア監督は、サブプライムローン問題に端を発した、アメリカ発の世界的金融危機の元凶がアメリカ的なキャピタリズムにあると見抜き、『キャピタリズム ~ マネーは踊る ~』（09年）を世に問うた。それに対してジェイソン・ライトマン監督は、経済不況のためにリストラ、失業問題が一気に噴出しているアメリカの現状下、皮肉にも腕利きのリストラ宣告人を本作の主人公として登場させ、人間の生き方と絡めながら、アメリカの問題点を浮かびあがらせている。

折しも日本では何ともタイミングよく(?)日本航空の破綻という大問題が起き、マイレージは何とか保護されたものの、株は紙切れと化してしまった。本作の原題『UP IN THE AIR』も意味シンだが、邦題の『マイレージ、マイライフ』もまた意味シン。そんな現代的センスが際立つ、ジェイソン・ライトマン監督に注目!

「リストラ宣告人」という職業は?

ジェイソン・ライトマン監督の長編3作目となる本作がアカデミー賞作品賞、監督賞、主演男優賞にノミネートされたのは、リストラ宣告人というライアンの職業が面白いため。そう思えるほど、飛行機に乗って全国を飛び回るリストラ宣告人というライアンの職業は興味深い。さらにアナ・ケンドリックが助演女優賞にノミネートされたのは、ネットでの解雇通告という新方式のアイデアで採用された新入社員のナタリーの職業が何とも今風で、社会的注目を集めたため?

他方、何十人、何百人という従業員を解雇するためだけにライアンは全国を飛び回って働いているのだから、ライアンが勤めている会社はアメリカの 社?それとも 社?ある程度、そんな想像がつく。「世界のトヨタ」だってプリウスのリコールが発表された今、いつまでトップの座を維持できるかわからず、近い将来ライアンのような人材が必要となる可能性も?

ところで弁護士も因果な商売だが、リストラ宣告人とは何とも因果な商売。もっとも弁護士はこの世から争いが消えない限りなくならないし、坊主だって人が死ぬ以上存続する職業だが、リストラ宣告人は経済が好調になれば死滅?その意味では不安定な職業かもしれないが、ライアンほどのレベルのリストラ宣告人になれば、そんじょそこのベテラン弁護士以上の説得力?

「お気楽な大人の関係」は男の理想?

真面目な日本人的感觉では、「お気楽な関係」「大人の関係」はプラス評価よりもマイナス評価の方が強い(?)から、「お気楽な大人の男女関係」になると、かなり批判的?しかし、同じような価値観を持ち、同じように全国を飛び回る、ダンディで魅力的なライアンと、大人の色香をたたえた34歳の美女アレックスが瞬間的に互いの匂いを感じとり、意気投合しすぐにベッドインに至ったのはごく自然な流れ。

ちなみに、2人の出会いにおける男と女のかなり露骨な(?)会話は非常に参考になるので、「お気楽な大人の男女関係」を求める人はしっかり覚えておきたい。「お気楽な大人の男女関係」というのは、男にとって理想なのでは?

ライアンとアレックスは同じ穴のむじな?

ライアンは自宅(マンション)をもっているが、そこは年間322日間もある出張の合

間の中継地点のようなもの。それに対して、アレックスの方は？そこらあたりがボヤかされながら2人の関係が進んでいくのが本作のミソだ。ライアンはレッキとした独身主義者だが、さてアレックスの方は？

物語がラスト近くになると、ライアンの勤める会社のボスであるクレイグ(ジェイソン・ベイトマン)が結局ネットによる解雇通告に方針を切りかえてしまったため、出張がゼロになってしまうライアンが、アレックスを自宅に招待するシーンが登場する。しかして、それに対するアレックスの対応は？こんな2人の関係は後にあっと驚く展開が待っているのですそれに注目！ところで、よく考えてみれば、2人の会話でも一方的にライアンが自分を語っているだけで、アレックスは秘密めいた存在であることがよくわかる。たしかに表面上はライアンとアレックスは同じ穴のむじなだが、さてアレックスの実態は？

リアルな登場人物も！リアルな音楽も！

リストラという現代的テーマを扱う本作にさらにリアルさを添えるのが、リストラされる側としてワンシーンずつ登場してくる多くの従業員たちの姿。いきなりの解雇通告に対して戸惑いながらも泣いたり、抗議したり、激怒したりと、その姿はさまざま。そしてまた、たくさんのおじさんやおばさんが見せるそれぞれの表情はリアル。そりゃそうだろう。この会社には従業員一人一人の人生がつまっていたのだから。中には、「橋の上から身を投げる」と物騒なことを冷静に(?)口走る女性従業員もいたが、そりゃ一時の怒りから出たセリフで一種の言葉のアヤ。ライアンはそう理解シタラーにもそう説明したが・・・。

本作がもう1つリアルなのは音楽。『UP IN THE AIR』という原題どおり、本作はジェイソン・ライトマン監督が自らサントラの曲を選んで作品の仕上げをしたらしいが、映画中盤とエンドクレジットで流れるメッセージ色の強いフォーク調の歌詞は強く印象に残る。『マイレージ、マイライフ』という邦題はラブコメ風だが、本作はそんなレベルの作品ではない。

そんなリアルな登場人物とリアルな音楽もしっかり味わいながら、本作のリアルな問題提起をしっかり受け止めたい。

ライアンの気持の揺れはなぜ？2人の女性の影響は？

本作のストーリーが動き始めるのは、ライアンがアレックスと知り合った時から。つまり、冒頭から導入部にかけては、1000万マイル達成を目標としながら年間322日間リストラ宣告人として全国を飛び回るライアンの自信に満ちた生き方がタツプリーと描かれるわけだ。ライアンの仕事上の動きをみても、私生活をみても、またライアンの講演内容を聞いても、ライアンの価値観には何の揺らぎもなく自信タツプリーにみえる。ところが、物語が終了する時のライアンの価値観は？それが本作のテーマだ。

西川美和監督の『ゆるる』(06年)は兄弟の気持の「揺れ」を描いた傑作だったが、ラ

リアンの気持が揺れ始めたのは助演女優賞にノミネートされた2人の女性演ずるアレックスとナタリーとの出会いから。まず、「気楽な大人の関係」を互いのモットーとした美女アレックスとのプライベートな交際は、2人にとって最高の関係のはず。しかるに、アレックスとの男女関係が展開していく中でなぜリアンの気持が揺れたの？

次に、たしかに優秀かもしれないが世間知らずの23歳の小娘に、ベテランのリストラ宣告人でボスの信頼も厚いリアンの気持が揺れることはないのでは？ナタリーの教育係としてアメリカ各地を2人で飛び回り、次々と従業員のクビを切っていくリアンの姿をみているとそう思う。ところが、そんな中でもリアンの気持は揺れていたようだから、意外に（やっぱり？）男心は繊細？

リアンの気持の揺れはなぜ？家族の影響は？

2人の女性との絡みが本作のストーリー展開の表の軸だが、実は本作にはもう1つ、家族をめぐるリアンの気持の揺れが描かれるから、それが本作のストーリー展開の裏の軸。妹ジュリー（メラニー・リンスキー）と婚約者ジム（ダニー・マクブライド）が写ったパネルを持ち歩き、出張の先々の観光名所で写真を撮らなければならない義務を背負わされたリアンは気の毒。だって「バックパックに入らない荷物はいっさい背負わない」がモットーなのに、そのパネルは入りきらず、はみ出してしまっているのだから。

それはともかく、嫌々ながら妹のために協力をしたリアンが、いよいよ明日は結婚式という前日の晩のパーティーに出席したところ、ジムが突然ジュリーとの結婚に自信がないから結婚を取り止めると言い始めたから大変。リアンは姉のカーラ（エイミー・モートン）からジムの説得係を要請され「一度くらい家族としての役割を果たせ」と言われたが、もともと独身主義者のリアンに結婚の意義を説得するなんてとてもムリ。誰しもそう思うのだが、さてリアンの説得は？そして、それに対するジムの対応は？年間32日間も出張しているリアンが家族のことに目を向けるヒマがなかったのは当然だが、ネットによる解雇通告の採用で出張がなくなった結果、リアンには家族の絆を取り戻す余裕が？

そうなればそれはいいのかもしれないが、家族をめぐるそんな騒動の中、リアンの気持はどのように揺れていくのだろうか？

2010（平成22）年2月12日記